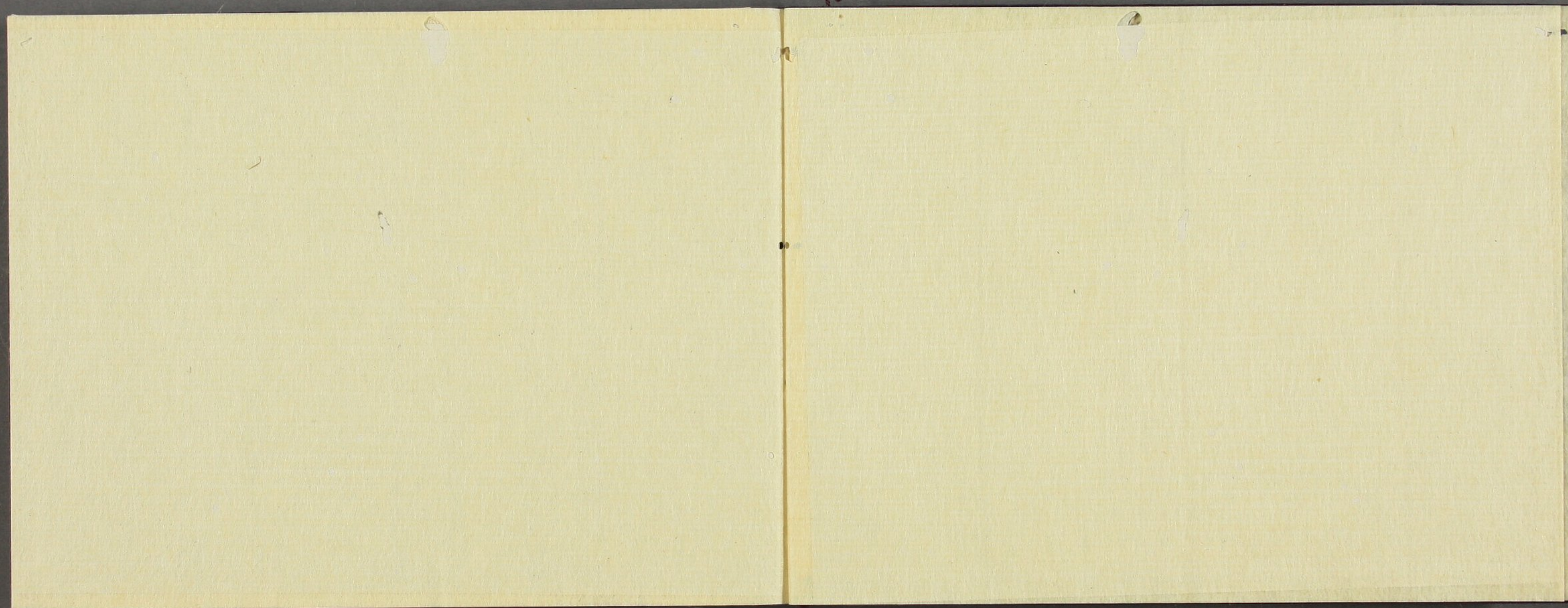


泉





柏木

卷若以詞并飲為若

うさまに葉を以て神といふは
今もいふ所の事也
詞三つうさまといふてとの
とうひ

源氏平八歳乃其より秋
かたけ事いんえさう今年
薰飯生也其葉下八平七
女此十二月よりあり

東のんぬむし思ーりこよ
可いね

東のんぬむし思 柏木也病
ふんこりねん年より
ぬる也源氏早公女也
ねもおろし 柏木ぬ
んは思ーて 父母よ
ふんこり父母に物と思
むしこあふんつた思
ふんはふんあふん

よく思は思ーぬ
も也ふん思を思ふ
乃こも也

あふんこり思ふ思
ふんこり思ふ思

女三宮乃思ふ思
またあふん思ふ思
ふんこり思ふ思
ふんこり思ふ思
ふんこり思ふ思

字面白く一筆く

ちくせいの世中

大方に神身なりからたはるる

ちくせいの世中なるるる

世なるるる

世に空なるるる也徳也

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

先世乃宿統りてこそあ

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

世なるるる

ひまの松もよ

古
友と別れはさういふさふか

ひまの松もよ

なみーとよいぬーし

源氏也あやーいふれ也也

宮及事とお前さあそよ

只今ちうくちあーいふれ

物さんよ也

今ふれおらあよーい 死期よ

喚てい人の恨心のいふ也

相本れ了言ありーうー但

女之宮にさうさう罪にさ

まけきさうさあしと不仁不

等れ罪に者もさあよやう

ひーさうさう也

よさあむのあむら

女之宮乃外れあむらは

さあれ也さあれと源氏也

此のあむらはおむさん也

うらーいー ありさう語也

松もう知ぬさう

古 海川松もさうさう知ぬま

若もさうさうさうさうさう

いほさうさうさうさう

病悩乃障也

いさはさうさうさう 女さう

乃文乃詞也小侍は方は

所さうさうさうさう

おもしろも 病者ぬさう也

今にもさうさうさう 烟も

松島乃烟の海も打げ思

いはのころさうさうさう

火也

公のもさうさう あさうさう

さう 福まのさうさうさう

新冥暗乃さうさうさう

と也

侍はさうさう 侍はさうさう

又ありとさうさうさう 侍は

に 相まのさうさうの 姫也

こゝろは 侍也

おぼろけの心

女三宮の心

御しけつあまの心

ま乃朝也

人の世を志す心

けつあまの心

あまの心

乃あまの心

まの心

ホシノ

本姓也

おぼろけの心

~~~~~

おぼろけの心

~~~~~ 葛城山

七つ山乃其つ也

~~~~~ 氣志ん

大長崎山の心

~~~~~ 験者

~~~~~ 柏木

氣は徳神と云り女子

地也

女乃妻也 女乃妻也

まがしつさうしん

ひづく一は神也おう

ろくまふ也まふ一見

くまのまふしん

小信信とおしあ一信

んね也

おとましぬくがも 大信也

まらわはさうしん

本信一つ信也

くまのまふしん

まの験者一はむしん

あまのまふしん

大切一は信者一はむしん

面あまのまふしん

あまのまふしん 柏木の信也

父信一乃朝とまふしん

信一のまふしん

はなはたのこころ

おのれはなほのこころ

——

—— 海印の

威光のこころ

みあをこころ

試案の海印

お

おのれはなほのこころ

中へおのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれ

おのれはなほのこころ

おのれはなほのこころ

おのれ

おのれはなほのこころ

おしなやうのうた

あつたあつた  
おしなやう

一念五百生 整念先量却  
おしなやう

懐姫の事也 平産といふ  
おしなやう

おしなやうのうた

おしなやう乃指しあめのうた

おしなやうのうた  
おしなやう  
おしなやう

おしなやうのうた

おしなやうのうた

おしなやうのうた

おしなやうのうた

おしなやうのうた

おしなやうのうた

おしなやうのうた

かきつらうと也のこん  
とあるとい柏木の身は  
ぬきのちもよかおんとも  
誰よりい言よつしけみ  
アおんともあはれこ  
るかかしくよこらうし  
てきもさる海と也  
さうして清わたる海  
前乃柏木の身は女に  
早の物んとする言也柏

乃御家乃桐子也之も立  
るしう清ての柏木の身  
えぬ早しの物うあは  
と也かかしくい早いもあ  
るあん也柏木とて子桐  
よのあまうはもよとい  
るしえたあはれこ  
はもよはうおるも思こ  
桐也され桐くると  
かかしく禁言の詞也

いとわこの烟さうりこ

は御尋にこそは舟のとせよ

このよみくいとせよ

調う人ともりちるも也

形急さふさうれ 別後

ゆめくはとせり 別命に

とちせしはと 別命

くちよふい人かもく

〜

いふいふいふいふいふい

無期也お初るく作あを

らあ也

〜

侍候のらもよまうねいあ

〜

此のくよ 侍候のの初候

早とあけく又あ〜

あはこのくれ〜

〜

〜

うねりやうねり 品産は乳也

思ふにちかき 源成は男子

なほはとも也

おもてをい 徒生也 蒼色

飛進の白之女子のつゆ也

いらしるに 男は西向へ

出るおちる道に 相子うして

みくくらくくく

男子にるはさうにとも

おとしるうの方あり

とひらくお也 女もはあ

川ひもさうのまをひら

まとも也

たそもあやや 冷泉院の

事也

昔の夜 申宮の秋好也

三ヶ夜 五ヶ夜 七ヶ夜 九ヶ夜

うあやうあひあうも也

院の屋上人 冷泉院屋上人也

ちりおし 相子れ不骨板

に大いし祝儀より紙  
師より也

寄せらんをらあ

七世は事ある

言はれり 女三宮の

ら申也

きされ こといさしあはれ

もういさしあはれ

源氏よりいさしあはれ

一おはれ也

かきよ 女三宮より事

きりいさし 師のいさし

也きりいさし源氏より事

いさしいさし源氏より事

いさしいさし源氏より事

いさしいさし源氏より事

世中よりいさし 源氏より事

いさし源氏より事

いさし源氏より事

一源氏也



かゝる人は 産婦なり也  
いづれに 源氏返答也  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と  
公申すは 出家の事也  
つくしむ也  
と云ふは 我々の事  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と

かゝるは 産婦なり也  
いづれに 源氏返答也  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と  
公申すは 出家の事也  
つくしむ也  
と云ふは 我々の事  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と  
いづれに 産婦なり也  
いづれに 源氏と

年以出對面ありしは  
産婦なり也

院を極つゝくありし也

あるしの院 源氏也

世中望ふありし 朱雀院

源氏の白河也

をくはせられたるは 乃理は

老定せ不定也るはあり

ありし女之乃きれたる

ありし也

いかにありしと 世同乃

人の襲駭也

うやうやしく 朱雀院の出

乃きり源氏ありやま

く早あり也

よりとありきなり

源乃詞也

御下はまらよ 女之宮は也

丁の山張のありし朱雀院の

ありし也

ありしはありし 女之病中

まねて人々はくろひさま  
けしひはたなわ下へおろ  
し。也米菩薩の礼讃  
をあれはらのうらまの

夜后 加持偈 驗

加持のまよふあはれま  
まよふのふらまらまよ  
らひ強し。まねも也  
私におひつらまらま  
女之宮のおわきんまよ

まねて安堵。おんま  
ふんまらまらなれまにお  
り。まねまらまらまら  
まらまらまらまら。朱菩薩  
まらまら。まらまらまら  
まらまらまら。平儀まらま  
まらまらまらまら。ま  
まらまら也  
まらまらまら。邪氣也  
まらまらまらまら

院の胡也邪元乃いふは  
負早とくもあ〜記よま  
らはこゝろ也

おら乃くいふくも〜也

着今と限あ〜片はま

〜も出家あ〜物と

と後悔あ〜んも也

ひんのも〜 兼蓄はひん中也

〜も〜 源也の〜も〜

〜と兼蓄はま〜也

〜と兼蓄はま〜也

人〜も〜 兼〜は母も〜

いん〜も〜 今病

氣な〜も〜 今も

〜も〜 也

〜も〜 源也の〜も〜

〜も〜 也

〜も〜 兼蓄地乃御

〜も〜 也

〜も〜 源也の〜も〜

若くはさるる海にさるる  
とてみえりしはかほり也  
にけりし 戒らるる也  
とてきつて結縁すす  
字とておかしき  
出家のまより此の根も  
ねね也  
何はつらうし 養育  
おんも也  
つらうし へいみ

一とて中よりさるる  
とてあつた也  
とてさるる也  
申返す也  
ふつら子 朱彦龍乃  
還御しつらふ  
らん也  
ふつら子 女三  
御を子とておんは  
ふつら子とておんは

源氏と云うるに

終一也

むしお印しる 命子朱

舊院古事化つみおのり

一も也

らうまーさ 乱る事也

在中のげらあふ

朱着の朝也お出家しよき

とある也

みーのんおろく かに書あふ

源氏の二 源氏(あり)を

源氏を意ふにあり

とも也

さるるもな 厚みあり

てはは院の内は行は

らうも也

はまのまをさる

竹根も疎略あるも也

おれらも 小島おれ

又あーさる也しる

はるる也

いふもふりやん 厚も

して本跡也

か乃集もんのここーうら

るのれれいぬ

のれ東門のここ 女三ノ産

并山出家乃る也

女三ノ 落葉をこ

うもおこも 母も致笑

片もういおををれも也

の乃高子 柏木にさるる

つこいこいんも也

えいれよわ 柏木にさるる

のれ高子也

二高乃高 女三宮也

のこまきり 柏木のこ

うのれ高子の 命のふん

張り気非るれ也

太夫年 柏木の才女也

太夫年とら也

かきんのもよよ 柳子あのか  
むらり也

よふこひ子 但夫細き乃  
候よむらりよくぬれ今

ふいふ内しあ〜いも也

大将の君 夕音也柳子と

従父也

いふこのいふも 面白也

むせく〜むらり

夕音ちねの神也

みよあ〜い 日は對面を

ふり也きれも今一夏

逢ねとむいとの對面を

〜

ねこあ〜い 丁 筆記物語

栗田殿の病乃申〜開白

よちりねよふ〜いよ小蛇

ふ殿さ〜いね〜いけを

ふ乃みをおう〜いよ

いれさ〜いね〜いけ





人ともいふに外は不  
道なるは人なり

病中乃任官平即ち  
客入は射面乃事以下

お似し下り

さるうよわ 夕音柏木切

かよわむりし好し也

まわしつゝ 親兄弟

まもつゝあ也

あまつく 夕音朝也

いとをさし

柏木返着也

えんりしつわ

白衣より烏帽子を

まぬらるる

血海にあり

病中は其用意あり

神也

うらとけあしつゝあはれ

は朝押し

わを何しわいする 龍莊子

いさしき 夕音は朝也

まろしきはしき

東のあまもは雲や世界の

まろしきはしき

夕音と物本はしき

しきはしき

て雲やしき

とみ物本はしき

公よは 物本は返答也

月もつや 不確也

神もつや也

さほしき

祈禱立成るも

れしき

物本はしき

乃んと死期を

ちする也

さるに 我んといさる也

うあれとて又さるに

事にお印と也

お為りも 父母はきりて

そとらんとさへりて母

るも也

身印ふりみり

孝行云々孝始於事親

中於事君終於立身

又云のうらに 是より相

本此源也のうらこまわ

張り音より好也

これ通 兄弟をくらふ

これ通 かくれり也

世中にかうく 源也

恐中をへ也

おろまぬぬ 名草下

酒をたぬぬ けり也

いもいもいもいも

前よ心ほろりとあぬ

いもいもいも

いもいも 終言也

ろろろ 勿論也後世の

ささしわしんちろろんも也

こいこい 勅事也

死後よりりともは勅事

証被免すは夕方此

証よりあんと也

あつくとおはせらるる

源氏に何乃意趣もあつ

さゆ也半と相本れん息

るあははとくろ始と

あ方へしとろろんきお

とと也

けよいきとも 相本れ調也

今ふあをとも

ほあよち道もあつと

きろふけいもあつと

んろろんきさゆり

あ系も也寡婦と

て朱蔭院もあつと

きろろめさんとも

はくろくあふとも也

ての地こゝろ 手控也

柳をたきり給拜也

如御をまゝ 弘徳殿女御也

おねれおこし 聖あはれ也

右大殿のまゝ也

むらう也

おむらうあふとも也

神をいぬ人あふとも也

あふともあふとも也

うらうあふとも也

女二宮あふとも也

つれあふとも也

うらうあふとも也

あふともあふとも也

柳をたきり給拜也

あふともあふとも也

せうあふとも也

道理あふとも也

あふともあふとも也

目つ志 知る也

つら死 命の誠生あ

らん驚くそわあらん驚

まわら也

わよしくいふはこゝに

まみり月海しりた也

これ君いふはなま 萱也

いふ也十日也

そわいともいふも

のちなる也

まいのこありさほり

厚なるまきりく本復を

えいこは也

西つ子 丁鏡云はははり

一 杖上の見こし生を

あつる也五十日乃ちもあ

あまよひさきをあつる也

中乃乃知年つこもは

あつるこもいとおは也

つとまふこもいこうも今も





きいしちるるいふやうなり

今世名のお色甚うらま

し香に似たり仍居るま

おふちるる

うういふいふいふいふい

海のうらまをいふ今世

花よあは

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

うういふいふいふいふい

不即志ることも 柏木乃

くまよあふぬまのほろ

きんとも也

あふぬのころしつちふり

源也のまをたぬつしつち

きんとも也

今片し何をもせん竹のの

うたのまをたぬつしつち

まげつと 玉氣也

あつちちち ちんとも也

程のようにおりてあり

柏木は無り

まろしお 眼中乃神也

あふぬのまのりけり

柏木は事也

志はるまのりてありて

事興傲く老而無子教は

言歡着在詩篇今年冬

各有一子戯作二什一以

賀一以自嘲

自嘲

五十八翁方有後靜思堪  
 喜亦堪嗟一珠甚小還  
 慙蚌八子能多不羨鴉  
 秋月晚生丹桂實古今風新  
 長紫蘭芽持盃祝願在他  
 語慎勿頑愚似汝父耶  
 五十八と 今年源氏四十  
 八才なほ也  
 汝七子也 汝子也 相

あり似るもさうはあ  
 すんとももんりい  
 朝もよ面白  
 二のりれりねん  
 相本乃媒如房乃らるる  
 あらんーと也  
 あらん あらん也然  
 せんそんかそんも有らん也  
 ありいらんやハ女三宮の  
 ありあらん也

おれをたれこゝろ 後仕春  
母上六重のまゝに 知れずは  
子よをたれも びきけりしは  
まもるゝも ぬれぬ也  
んやううゝまじり  
けりし身びうゝまじり也  
け 調面白ー  
こゝろ人をば ころんを  
ぬん事えん也  
まもるゝも ぬれぬ也

梓弓のまゝ人の小松のまゝ  
万世のぬれぬも ぬれぬ  
は思ぬのねに ぬれぬ  
ぬれぬ也  
いよおほすしん ぬれぬ  
相本限のいゝおほすしん也  
おれ君の 夕昔相本乃遺  
言のまじりぬれぬ也  
すゝしぬのおほすしん  
相本限のおりぬれぬ也

女にわたくし 女に言ふ事

誠を以てあはれむ事也

すむる事 すすむ事也

二条の人の 言ふ事也

限のわたりて出来たり

あり 誠を以て言ふ事也

制 治す事也

不審 事也

物に言ふ事 物に言ふ事

子に言ふ事 子に言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

言ふ事 言ふ事

一も也

さういふ事——因果が

いふもいふ事はあつた

——因果も也

女房の事——愛舟の事也

柏木兄弟也

あつた事——事かんと

柏木遺言の中に出て

源氏の事——此もいふ

事也

ちかお——いふ事か

いふ事か——いふ事か

いふ事か——いふ事か

物事か——いふ事か

いふ事か——いふ事か

法——いふ事か

僧乃布施也

いふ事か——兄弟の事也右

大舟は御梅の事也

いふ事か——いふ事か 冥途の事

さきつゝも

一糸おきよは 女二宮也柏

本共家也つあよ對面を

うり也

みさつゝくあさつ 鹿乃

長巻銅也

思ふ心しつ 思根也

ひし目まん ちうれ母に結

はたしめさるるも

ちよよもあつあつ 山口乃

前より前と進んおれぬ

るも也

大将の ちうれもよ

らひはは初彦ん

いふれとと 夕暮朝也

さるれんや 見申さる

ちうれ

いふの程よし 柏木乃

遺言あも

あはれのと免るれ





はるおのり

後集子よ

すくなくとも 小島お乃の

かくくくよ 相子よ別

又後集子よ

おのりよ

うさおのり

と女ははるおのり 相子に

おのりよ

美引おのり

はるおのり

あつらひ

はるおのり

今ら

はるおのり

はるおのり

はるおのり

はるおのり

はるおのり

はるおのり

也

河のたなほの川 山島  
乃早きぬわづらさく朱  
養肥のさくさくも  
物さよらひさくも

さくも  
さくも  
よむかしくあまの網子  
さくも  
一人さくも

さくも  
さくも  
も也

夕音  
夕音  
夕音

夕音  
夕音  
夕音

五つはうあひのうたむらき  
早あやう

柏木現存の母のあま

の念はらうううううう

ううううううううううう

うううううううううう

うううううううううう

あやう 柏木現存

あやうううううううう

あやうううううううう

あはうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

あやうううううううう

糸の尾の柳也夕音の  
ハ五六十年乃兄也

トモトモトモトモト

深草神子の孫トモトモト

トモトモトモトモトモト

あひんともも

春のよき花のちりあひん

あひんとももトモトモト

夕音の尾はあひんともも

トモトモトモトモトモト

トモトモトモトモト

トモトモトモトモト

トモト

時あひんとももトモト

夕音の尾はあひんともも

トモトモトモトモトモト

トモトモトモトモト

トモトモトモトモト

トモトモトモトモト

トモトモトモトモト

あすはかしの 昔は家  
まゝとまゝのぬ人を  
根幹りやまゝと也  
ちかおの殿しあは  
ゆるくはくまゝ  
りし大あま 夕音お  
一乗まよりすゝい  
ひ中はる也  
おろわ 出居 常れ殿也  
まゝしやうとけよ

親乃妻よりもわかれ  
えしやうりぬま  
夕音お大いぬ  
えんあひま  
海はくまゝの神也  
あのおまゝも 養ふも  
けしきくぬを 柏まゝ  
うあゝは 父大  
おは官位のみ  
まゝも思ふまゝあり

さゆり草一花も也

けりし草も一花も也

夕暮れに思ふ人出居や

と立つていふ人も座も

も一花に思ふ也

にけりし草に 子に服

よよもくもや思ふは思ひ

よも思ふ也

る思ふもたも思ふもん

物も父も思ふも思ふも

物も服も思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふも思ふも思ふも

思ふの思ふ也

思ふも思ふも思ふも

君のうへー一軒為虫のねは  
おけと申すもさういふるが  
今及なぬと申のぬうらん  
秋は海らういとさうも  
——

果舟信のす

夕身つしとて記家と  
虫のぬうぬ秋のうら  
ぶらうけい——

服若れ着也

ふらういさうる 濃鈍色  
けりけらうらう 色入  
けいふれも鈍色をれ也  
とまはすのこま 色入  
座也  
うらまうらうと

連理のわらうらも也

うらうはあ——けけい

うらうらうけけい

東あつる柏と楓のやう

あはれなるも也  
乃神に志忠門終るといふ  
みよのよとていふ 養の終  
しるまのよとていふ 神に  
此書お返すしるま  
但る末の事と見え  
しるま今い富に也  
任まぬとていふ  
と也  
しるまの 女おの

いしるも調也 終るといふ  
さあといふとていふ  
らしとあはれとていふ  
と也 女おの事と 後父身  
也 此書おの終也  
う此書中と 此書所  
乃調也  
あはれなるも也  
夕書乃調也  
さあといふとていふ



限ありていふはなほ  
さういふも

こは子こは 女二宮也  
乃あくありぬい  
とら

今もいふ  
別給ふも  
女二宮也  
れあつていふ  
はすこも

つらつら

女三よにおと推量

一也

みらあな

みらあな

あな

世宮人

又は

あな

あな

大海ありきるも也

やうふとをきき 人ははて

心こそ肝要も也

今はね ことわり 調也

しよとに 柳ありしをき

つて也

よきとらもめく

よきとらもめく

よきとらもめく 柳ありや

源氏のりきこひ女房深也

ひみきりしを海も也

たよりしに 海ありき

音をとらしきみき也

いふしやうらんつしよ

天與善人吾不信 右將軍

墓草初秋 純在冒

時平大將ノ息保忠乃る

也 大將 將軍

としり 右兵門將も令吾

將軍としり 右將軍也

お遠く也 昨今卯月の夜也  
庭にわらうくあはれこころ  
あま草にさへさへさへさへ  
あはれあはれ秋の字季節  
お遠くすまふよりのとく  
さる也  
さるもいささか 八重天  
お保志兼平六年にさる  
ねこはお遠くは成すさる  
さる也 ねこはさるさるさる

さるもいささか 八重天  
お保志兼平六年にさる  
ねこはお遠くは成すさる  
さる也 ねこはさるさるさる  
さる也  
さるもいささか 八重天  
お保志兼平六年にさる  
ねこはお遠くは成すさる  
さる也 ねこはさるさるさる

